

JEEFでは、「誰ひとり取り残さない環境教育」の実現を目指し、一人一人が自分らしく学び、生きる力を育む場づくりに取り組んでいます。

新連載「誰ひとり取り残さない環境教育」では、全国で多様な人々に寄り添いながら、自然や地域とつながる実践を行っている団体や取り組みを紹介していきます。第1回は、藁細工を通して子どもたちの“生きる力”を育む「われらの学校」です。

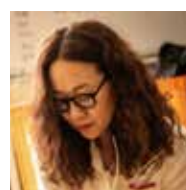
誰ひとり取り残さない 環境教育を目指して



われら 藁と子どもたちの つながりを見守る

佐藤 由希子 (さとう ゆきこ)

一般社団法人「われらの学校」理事長。株式会社「わらむ」、有限会社「ALBOTH」のクリエイティブディレクター。2018年、長野県に移住。藁細工を製作販売する株式会社「わらむ」の創業に関わり、現在まで運営実務をおこなってきた。2024年、一般社団法人「われらの学校」を発足し、以後、その代表として運営を担う。



私たち「われらの学校」では、日本の伝統文化である「藁細工」作業を通して、現代の社会生活を苦手とする子どもたちに、自然環境に触れる大切さと、自活するための技術と自信をじっくり身につけてもらいたいと考えています。また引きこもりや不登校に苦しむ子どもたちを藁細工職人に育てて、働く場を提供することに繋げています。

「われらの学校」では、個人のスタイルにあったカリキュラムを受けてもらっています。例えば力仕事が得意な子であれば稲刈りや藁を集めて運ぶ作業をしてもらい、手先を動かすことが好きな子であれば、藁細工の技術を覚えて製品を製作してもらいます。中には在宅で作業をして、月に1度納品する働き方の人もあります。藁に関わるお仕事は沢山あるので、一人ひとりの個性や都合に合ったカリキュラムを柔軟に用意しています。



われらの学校

「し」漢文の返り点。安心して戻って来れる居場所、心を休めることができる場所という意味を担っています。



われらの学校に通っている高校生と、日本で唯一大相撲の土俵を任される酒井親方の3人で編む注連縄

藁がもたらす癒しと、 自分を取り戻す時間

子どもたちが藁細工を楽しんでいる様子を見ると、「稲藁」の持つエネルギーが子どもたちに良い影響を与えているように思えます。直接藁に触れて手触りを楽しみながら癒されることもあるでしょうし、手作業を通して指や手のひらの肌感覚をより大切にできるようにもなります。田んぼの力作業を経験することで自己肯定感を深める子どもたちもいます。学校では得られない様々な作業を経験することが、かえって家の外に出る勇気をもたしらしてくれるのかもしれません。

経験がある方もいるかもしれませんが、義務教育の学校の教室という限られた空間の中には、様々なヒエラルキーが存在し、そこに居心地の悪さを感じることがあります。特にそれが苦手な子どもたちにとって、管理的な生活から離れて、自分の好きな作業に没頭することができる時間は、とても大切です。私たちはカウンセリングや座学の暗記教育をさせるかわりに、「藁細工」の



わたらの学校で学び、現在は製造部門の要となった市村工場長

周辺の作業を提供することで、子どもたちの興味と関心、働く喜び、そして好奇心に最大限に注目して、そっと見守ります。前のめりの子もいるし、ゆつくりの子もいる。私たちは何かを強制したり、命令することはしません。長期的なスパンで見守りながら、故郷のような、気楽に帰ってこれる居場所をつくりたいと思っています。

“教える”ではなく “見守る”から生まれる学び

今では現役の「藁細工」職人として働いている、女性のことを話してみようと思います。彼女は「レレレ」という、縄緬（なわぬい）の非常に細かいオリジナリティデザインの上め藁飾りを製作する「藁細工」職人です。ここを訪れる前の彼女は人間関係が苦手だったのですが、「藁細工」を教わったその日から藁製品作りの修行に没頭する姿がありました。私たちがからとやかく言われなくても、細工作業を楽しみながら一心に打ち込み続ける姿。大好きな猫を作業場で世話をする姿。毎日のように作業場でやってくるようになった彼女に、製品の大量注文が入りました。自分の作品ということもあって、自分でなんとかしたいと、納品までの二週間、朝五時まで作業して、仮眠



女性が手掛けているしめ飾り（わら飾り）「レレレ」

おひつを保温する製品「わらいずみ」

に家に帰って、また作業場に来るという生活をしていました。そこには徹夜してでも仕上げていく、妥協しない責任感が生まれていました。そばで心配する親方を尻目に、納期の朝まで粘って、丁寧に作り上げていく彼女の真摯な姿に、私も感動を覚えました。プロ意識をもつて楽しむ、最後まで仕上げる、ということを実現してくれた彼女の周りには、仲間との連携や信頼、そして親愛の情愛が生まれていました。人から命令されたものではなく、主体的に取り組んだことだからこそ、自分と藁のつながりを感じることができたのです。

これは彼女に限ったことではありません。それぞれの子どもたちにはそれぞれの道があり、様々な楽しみがあると思います。そして、自分の好きな遊びの先にある仕事の楽しみや、自立する社会生活の楽しみ、また、大きな地球が支える自然環境の愛し方や感謝を体得していきます。そのような子どもたちのそれぞれのカタチを「わたらの学校」では見守って育ててあげたいと思います。



「わたらの学校」ウェブサイト
<https://warerano.jp/school1/>